

五 輪 山

藤川昌寛

広島の山といえば 比婆山、臥竜山、恐羅漢であるが、平家伝説が残る五輪山に‘16/10/18日登る。

安芸太田町加計バイパスから太田川背後に大きな山並みの五輪山（832.7m）が望める。天神社石柱より上り坂に入り直進する、東に吉水園に至の標識を通過し、行き止まりに地図入り案内板（駐車2～3台可）見て、左折れ直進する、山道に入る。しばらくトラバースぎみ、旧火葬場、土俵場、砂走、テンテン山、五十駄（馬に積んだ荷物を数える言葉）、古い従来道を歩く実感が湧く、よく見れば足元は、重なる落葉層、苔むした石積道ではないか、熊野古道に負けない。標高470mに鎌ヶ原入口標識と古い石の道標だった。コースに付けられた名は、ゴリラ岩や、一本^{とち}橡、^{ししがたに}鹿ヶ谷、水場には岩海（野呂山の岩海の様）が斜面を覆い、標高710mの鞍部分岐点の寺屋敷だ。

尾根を直角東へ、けもの道の様相、笹で道が消滅寸前、朽ち果てた小さな五輪塔、山名由来の看板、3分で三角点のある五輪山山頂だ。

山名由来は「京都福原を追われ屋島の戦（1185年）に敗れ河野水軍に守られ西海に赴く途中、源氏追及厳しく止む無く、平安時代六波羅探題の役人であった尾沢何某と栗栖何某、同勢300余人が加計にいたる。

川三方にあり、それぞれの行き先を決めんがため正面の高き山に登る。そこに五輪の塔を建て、京以来の亡き人の菩提を弔う。以来此の山を五輪山という」とある。この案内板の足元にその由来の小さな五輪の塔が立っている。

60～70年以上の杉、ヒノキ林が林立し。鬱蒼たる針葉樹林帯で真昼でも暗い。山頂からの展望はない。

以前より加計地区 加計出身者に栗栖姓が多い事を感じていた、故二男^{よしひろ}洋啓入院の広島大学病院担当医が栗栖教授だった。